

民間相談機関における臨床技術について

—就園前障害児の指導技術を通して—

その5 本研究の総合的枠組と子どもの変化

家庭生活研究会 水島 恵一 (文教大学)
宮崎 徳子 他

序説：本研究の目的と総合的枠組

本研究は、児童相談、治療教育に関する総合人間学的実践研究として、相談機関、施設を児童・家族の「生活の投影の場」としてとらえ、そこでの処遇を通じて、現実的レベル及び象徴的レベルにおいて、生活の再編成がなされていく過程を明確化しようとするものである。それはすなわち相談機関施設の構造と機能、スタッフ、児童・親を含んだ治療集団の構造と機能、及びスタッフ・児童・親の心的構造と治療・成長過程を相互関連させてとらえることにほかならない。また、医療、心理臨床、ソーシャルワーク、障害児教育を総合した実践的視点を明確化することにつながる。

基本仮説は次のとおりである。

- 1) 相談所は、クライアントの全生活の投影の場であり、そこでの学習を通じて象徴的(※)ないし現実的レベルでの人格・生活の再編成がなされる。これは相談所が、クライアントの内的外的諸問題を原則として切り捨てないこと、したがって特定の役割だけに限定されない総合的機能をもつことを意味する。
- 2) 相談所における全クライアントと全スタッフは、潜在的に集団を構成し、この集団内で、個人個人がその多様性に応じてどのような活動を選ぶのが、クライアント自身およびスタッフの判断で決められる。

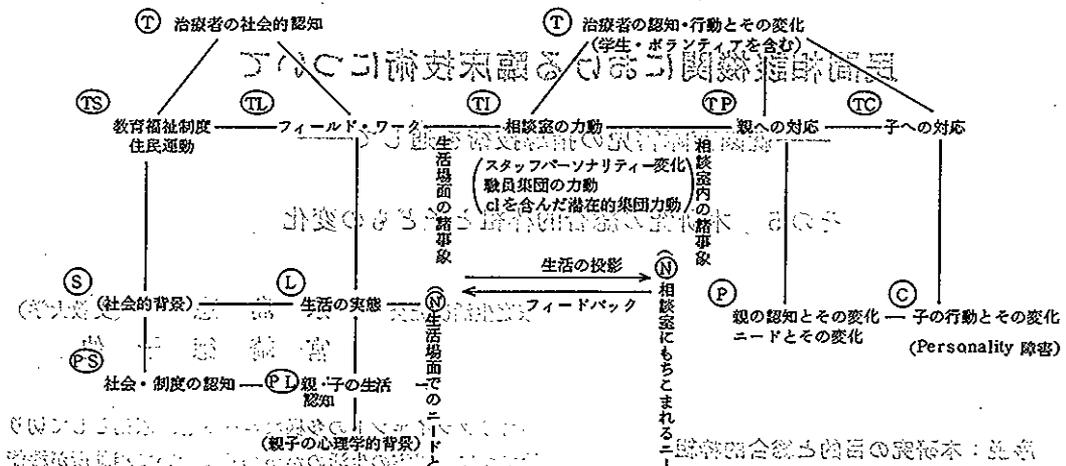
(※) ここで象徴的レベルというのは、通常心理療法的といわれているレベルのことをさす。つまり面接場面で、クライアントの問題が象徴化され処理されることを通じて、間接的に現実問題の解決がもたらされると考えられるからである。

以上は、クライアントの現実の要求の多様性に目を向け、既存の臨床的役割概念をこえた問題意識に根ざす時には、必然的に包括されなければならない視点である。

つまりクライアントの多様なニーズを、原則として切り捨てずに、現実の生活のかかわりにおいて相談所が機能していくことであり、これまでの治療指導理論体系では、無視または軽視されている面を含むものである。

以上のように、設定された仮説にしたがって実際に我々が研究を組織しうる構造を円式化すると第1図のようになる。当然のことながら臨床、教育現場が中心になって研究を進めるため、相談室に持ちこまれるケースのニーズと相談室内の諸事象から我々は出発することになる。図の中央⑩に示されたものであり、これが左側①の投影としてとらえられるわけである。この場合生活とは背後に⑤社会的背景をもつたものであるが、その社会関係はすべて相談室にもちこまれるわけではない。また心理学的背景として子どものパーソナリティ、発達史、親のパーソナリティ等の要因があるが、これらもすべてがもちこまれるわけではなく、生活ないし認知を媒介にしてもちこまれるという意味で、⑤の社会的背景と同じく単に本研究の背景の考察としてのみ用いるのにとどめる。したがって本研究では、直接的には、右側の②③を中核的変数として扱い、それが左側の生活の投影である面を重視するわけである。左側の実生活変数が右側の相談室内諸事象に投影され、処理され、左側の実生活場面にフィードバックされることが理論の骨子だと言ってもよい。逆にいえば直接観察の対象による右側の相談室内諸事象は、子どもの行動・認知(パーソナリティ・症状を含む)及び④家族(主として母親)の行動・認知である。これらの好ましい変化が一義的には治療教育の目的であり本研究の中心課題ではある。しかし本研究が「生活の投影」を重視するからには、それが逆に図左側の実生活及びそれを取りまく状況にいかんにかフィードバックされるかということを含め、実生活と相談室内との相互作用が問われなければならない。本仮説における⑩ニーズは、

第1図 (総合図) 本研究全体の枠組



まさにその媒介、総合の役割をにならうものである。相談室の総合的機能を直接具現するものは、中央上段(T-I)相談室の力動である。ここでは①スタッフの諸条件がボランティア及びその変化も当然問題になる。またそれらが構造化された集団の問題やその変化も問題になる。こうした相談室の力動の表現として右側に示した(T-C)子への対応、(T-P)親への対応がなされる。本研究ではまた、学生ボランティアの役割を重視するため、彼らにおける、あるいはその集団における(T-P)、(T-C)が重要な研究対象になる。これらは前述した②、③に直接ひびくものとして従来形式の教育が臨床研究の対象になるほか、同図左側の生活場面に就いて実生活の中での相談援助機能と相関させていかなければならない。理念的には、相談室自体が、地域生活場面での援助機能、さらには住民運動などを含むコミュニティ活動が本来の機能をもつことが考えられるが、本研究ではこれらの領域は、とくにそれを顕著に行なっているいくつかの地域ないし機関の研究として事例的にとりあげるにとどめる。なお、以上を通じて、スタッフの認知を直接にとらえる主な変数として常に扱うことは、親子に対する場合と同様である。

以上のような枠組のもとに民間児童相談所の例として、本研究は家庭生活センター相談室及び文教大学付属相談部相談室における事象を統計的、事例的に明らかにし、付加的に、その他の相談所における若干例を参考にすることになる。またこの目的のために我々が用いる諸測定は、対子ども、対親、対治療スタッフ及びボランティア

及び社会・文化・制度的背景にわたるが、年度ごとに報告する主題に基づいてそのつど述べることにする。とくに通常的自由観察記述、評定尺度、質問紙などに加えて、文教大学及び東京臨床心理研究会において開発された図式的投影法が各対象に対して用いられており、それによつて要素的測定と現象的観察の橋渡しを試みることも、本研究の方法論的特徴であるが、詳しくは、次の報告にゆずる。55年度時点において何らかの程度において用いているテスト欄は第1表のとおりである。(※は家庭生活センター及び文教大学相談室で比較的継続的に用いるもの)

第1表 テスト一覧 (子供(C)、親(P)、治療者(T)を対象としたものに関する主要なもの)

略号	テスト名	評定者
* C ₁	子どもの Play 行動評定尺度	(スタッフ)
* C ₂	子どもの Play 行動図式投影	(スタッフ)
* C ₃	子どもの生活場面行動質問紙	(親)
* C ₄	子どもの生活場面図式投影	(親)
C ₅	Play 場面複合図式投影	(スタッフ)
Cn	その他子どもの行動・認知に関するもの	(—)
* P ₁	親のニード評定尺度	(スタッフ)
P ₂	親の態度図式投影	(スタッフ)
* P ₃	親のニード質問紙	(親)
P ₄	親自身の図式投影	(親)
P ₅	親子関係単純図式投影	(親)
P ₆	家族関係集団図式投影	(親)
* P ₇	親子関係カード式投影	(親)

Pn	その他親の行動・認知に関するもの	—
T ₁	スタッフの治療関係質問紙	(スタッフ)
T ₂	スタッフの治療関係単純図式投影	(スタッフ)
T ₃	スタッフの治療関係カード式投影	(スタッフ)
T ₄	スタッフの治療関係複合図式投影	(スタッフ)
T ₅	スタッフの集団関係図式投影	(スタッフ)
Tn	その他、スタッフ、相談機関の機能と認知に関するもの	—
L	その他生活事象全体に関するもの	—
S	社会的背景、とくに教育・福祉・臨床体制に関するもの	—

第I部 子どもの行動とその変化

(親・治療者の認知として)

〔目的〕

55年度本報告においては、前記総合的枠組(総合図)を背景にもち、54年度までの家庭生活センターの子備研究に基づいて子どものplay場面の行動評定(C-1, 2)、子どもの生活場面の(母親による)行動評定(C-3, 4)について、その変化を中心に相互関連を検討する。このうちC-1, C-3に関しては、項目ごとの分析に加えて相関分析によるカテゴリー設定とそのカテゴリー得点を参考にする。C-2, C-4の図式的投影法の本格的展開は次年度以降にまわし、本報告では、図式投影結果も尺度評定結果と同様の要素の整理に限定する。(図式投影法については、とりあえずは文教大学人間科学研究会「前掲『体験と意識に関する研究』第3表(1981参照)』」以上に基づき、子どものplay場面での行動変化(スタッフの認知)と生活場面での変化の対応を求めるわけであるが、正確には前者はスタッフの認知変化、後者は親の認知変化なので、テスト間の相関および事例研究によって、子どもの客観的变化と、親・スタッフの認知とをできるだけ分化させること、諸テストの有効性の吟味と、臨床的実務および研究のための有効なテストパターンの確立が同時に問われていることになる。

〔注〕なお本論の資料収集および整理については、多くの部分を文教大学付属相談室(主任、斎藤恵子)および54, 55年度学生協力者に依存している。

〔方法〕

(1)被験者 当家庭生活研究会および文教大学付属相談室において、半年以上集団のグループ指導(週1日ないし2日)を行なった障害幼児(知恵おくれ、自閉症等、現象的に発達のおくれと生活の障害をきたしているもの)3歳～5歳、54年度31例、55年度34例。当研究会と文教大の差、およびその他の機関施設における結果との比較

については、後の年度にゆずり、また年次をこえての集計も後の機会にゆずり本年度は、54年度、55年度別に集計吟味することにした。(今後年次別、機関別の統計を積み重ねる方針である)。①集合的データ(集団別)の②テスト時期は年3回、4月、7月、10月とした。ただし年度始めの発足が遅れた場合など若干ずれたケースもある。③テストの種類(巻末参照、当初理論枠にもとづき予備研究の結果修正したもの)。

- C-1 子どものPlay 行動評定尺度
- C-2 子どものPlay 行動図式投影
- C-3 子どもの生活場面行動質問紙
- C-4 子どもの生活場面図式投影

〔注〕統計、ケース研究とも数年間の積み重ねが計画されているので、その意味では、本報告は、予備研究からの移行段階のものであり、とくに統計的結論は暫定的なものである。補足は、次年度以降の付論として報告の予定である。

〔注〕年次別、機関別の統計資料を積み重ねることは、本研究のひとつの副次的方法論でもある。それは、機関や年次による差異を明らかにするためというよりは、計測しにくい諸条件をも考慮に入れた上でなおかつ一貫したものを求めるための手法として考えられる。周知のように臨床・人間学的研究においては、条件統制は基本的には困難であり、したがってある条件(ここでは機関と年次)のもとでいかに厳密な測定を行なっても、それは他で通用するとは限らない。(この故に年次機関別積み重ね方式によるわれわれの長期計画がたてられているが、他の機関、他の施設においても同様の比較検討できる資料があることを期待したい)。なお、同様の理由でこの段階における統計的検定にはあまり重点をおかず、むしろ①年次を越えて一貫してみられる傾向、②主傾向に反する例外の分析を重視する方針をとっている。

〔結果I〕子どもに関する諸テストの基礎的吟味

①子どもに関する諸テストすなわち子どものplay 行動評定尺度(C-1)、子どものplay カード式投影法(C-2)、生活場面での子どもの行動評定尺度(C-3)、子どもの生活場面におけるカード式投影法(C-4)の各テストについて次の基礎的吟味を行なう。

- (1) C-1, 2, 3, 4それぞれに関するパターン設定
- (2) C-1対C-3, C-2対C-4の相関関係(生活場面とplay 場面の対応)
- (3) C-1対C-2, C-3対C-4の関係
- (4) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (5) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (6) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (7) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (8) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (9) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (10) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (11) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (12) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (13) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (14) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (15) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (16) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (17) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (18) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (19) C-1対C-2, C-3対C-4の関数
- (20) C-1対C-2, C-3対C-4の関数

(I-1A) 子どもの play 行動評定尺度 (C-1) に関するカテゴリを設定：各項目の相関関係と意味関連に基づき54年の31テストについて行なった。すなわちまずC-1の17の項目すべての組合せについて相関係数を求めた。次に相関の有意水準にはば準拠し、各項目間の関係を相関係数0.35~0.49、0.50~0.59、0.60以上の3種に分け、相関の高いものから一定規準でグルーピングした。この際、分類が操作的に意義的に定まらないものについては、意味関連によって分けた。結果として第2A表の5カテゴリが得られた。

第2A表(C-1) 子どもの play 行動評定尺度に関するカテゴリ

I	2, 3	「母子分離と緊張の度合」
II	4-1, 4-2, 5-1	「遊び(の活発さ)」
III	5-2, 7	「T.Hとの関わり」
IV	6-1, 6-2, 6-3	「他のメンバーとの関わり」
V	9-1, 9-2, 10, 11	「言語」

注) 項目1「相談室へ喜んでくる」8-1「感情表現が豊かである」8-2「感情の動揺が激しい」ほどのカテゴリにも入らなかつた。8-1と8-2の相関も予想に反して相関係数0.27と低い。
(I-1B) 生活場面での子どもの行動評定尺度 (C-3) 母親記入)に関するカテゴリを設定：C-1の場合と同様の手続で、ただし相関係数0.5以上の群を基礎とし、付加的に0.4以上の項目群を意味関連を参考にしながらグルーピングした。得られたカテゴリは第2B表のとおりである。

I	4-1, 4-2, (6-1), 6-2, (6-3), 7, 20	「一般的関心」
II	5-1, 5-2, 5-3, 5-4, (17)	「大人との関係」
III	2-2, 8-2, (9-2), 10, 11	「言うことをきく」

注) カテゴリ-Iは、理論仮説の枠組からは若干理解しにくいものであるが、おそらく大人との直接関係を除いた「一般的関心」といったものに近く、対人的関心としては「友だち関係」に代表されてあらわされているものといえる。またカテゴリ-IIIは、素直さという面もあるが、母親による評定であるため、むしろ親の生活感情として「言うことをきく」ということが前面に出て、感情の安定、一人で留守番できることなどを含んで、ひとつのパターンを成立させているように思われる。

以上の群に含まれないものとしてまずあげられるのは、9-1 (9-2と0.4以上の相関はある)が言語項目でありながら2群Iの社会性発達と0.5以上の相関を示している。その他では、1-1、2-2が相互に0.4以上の

相関を示す (1-1は「関心」の2項目と相関あり)。以上の2群によって、minorなカテゴリを設定することも可能である。その他の3, 7, 12は、いずれの項目とも0.4以上の相関を示さない。

(I-1C) 上記C-1とC-3の相互関係：C-1の相関分析による類型が、当初の理論的カテゴリと比較的一致していたのに対し、C-3は(理論的にはほぼC-Iに対応して作製されたにもかかわらず)そのニュアンスがかなり異なり、母親の子どもを見る目の特徴を示唆するとともに、それが臨床家の認知スキーマないし心理、社会的常識と必ずしも一致しないことを示唆するものである。

両テストの4-1, 2に代表される「遊び」は生活場面(親)にあつては、友だちと不可分のものであり、また、5-1~4という大人・家族との関係の一貫性は、対T.H関係については一貫性をみせていないということになる。これに対して6-1~3という対他児関係が一貫することは、双方に共通であるが、9, 10, 11の一貫性も双方にほぼ共通している。
(I-1D) ガード式投影法(C-2), (C-4) のパターン化とその傾向(C-2とC-4の差を含む)：本来は、図式的投影法の意味と使用法・整理法について略述したが、それが臨床過程の評定にどう使えるかという点の我々の今までの吟味を述べるべきであるが、かなり紙面を必要とするので次回にゆずり、ここでは要素的評定としての面からガード式投影(ガード式評定というべき面)の結果と評定尺度・結果との対応をみるにとどめる。構造がメッシュとしても positive-negative、(以下P-Nと略す)バランスおよび次のカテゴリーの対概念の類別(A~E)の組合せを用いるにとどめた。対概念類別は、④快-不快、⑧交わり-孤立、⑨安心-不安、⑩積極-消極、⑪表情豊-無表情であり、P-Nバランス類別はP/PP, P/PM, P/NN, N/PP, N/PM, N/NNである。後述する第5表は、C-2, C-4に関する前後変化を記してあるが、ここではとりあえず前後期を通じて一貫してみられるパターンのみに注目しておくたい。
まず54年度のものにつき遊び場面に関して、一貫して多く出現するパターンは、④の快不快に着眼した完全P/PP型(T.H評定)のみであり、ただし母親評定ではほとんど出現がない。(なお母親評定では全体的にN/NNが若干多いようであるが年度では否定されている)。対T.Hではどくに顕著なものはなく(ただし55年度ではP/PP多数)、対母親では、圧倒的に⑨安心不安に着眼したP/PP(おそらく実質的には母親に対する安心感を基調とした positive な感情)が強調されている。

一方、出現率の低いものをみると、④に着眼したnegativeなものC-2、C-4に一貫してほとんどないこと（治療者、母親とも不快を基調とした行動をあまり重視していない）、遊戯治療場面における⑥⑦もほとんどないこと（孤立、不安がとくに重視されていない）、日常生活場面で⑧のnegative型が少ないこと（母親が無表情をとくにとりあげない）などがあげられる。治療者は、対play場面、対THともF/NNが少なく、母親は、対母negative（F/NN以下）をほとんどつけない傾向にある。以上は子どもの特性というよりは治療者、母親の認知特性である。

I-2 play 場面と生活場面の対応

本来は、C-1対C-3、C-2対C-4の、それぞれ相対応するスケールまたはカード投影結果を比較検討すべきであり、この目的のために生活場面用C-3、C-4は、C-1、C-2に対応して作製されたわけである。しかしC-1、C-2記入者が治療者であるのに対して、C-3、C-4の記入者が母親であるため両者の差は、相談室場面と生活場面の差なのが治療者と母親の認知の差によるものかを判別することが困難である。I-Dで述べたC-2とC-4のパターン差も、多分に認知の差を反映したものと見るべきであり、それぞれあたりまえになった点や、とくに評定に出でこないことを暗示するとともに、とくに母親が子どものnegativeな面を表現したがらないことをも示唆しているようである。したがって比較的、客観的に両者の対応を検討しようするのは、それぞれの変化を検討したのちに述べることにし、ここでは、単におおまかにC-1対C-3、C-2対C-4の前期の結果の比較を述べるにとどめる。まずC-1対C-3については、前述（I-1C）したパターン差の差、各項目間相関の差が、play 場面と生活場面の差を暗示している。個々の項目間の対応は、変化の対応として吟味されたが、有意な対応は、みられない。ただとくにC-3における変化がとらえにくいためもあり、この段階で結論づけることは困難である。今後例数を重ねることによってC-1、C-3の対応を再検討する必要がある。

一方、C-2対C-4に関しては、すでに前項（I-1D）で略述した。そのほかたとえば、play 場面で「積極」が1位カードとして強調されているが、日常生活場面では強調されにくいこと、逆に「交わり」が日常生活で1位に選ばれがちでありながら、play 場面では、見られないことがあげられる。後者がplay 開始時という客観的条件の反映だとみられるのに対して、前者は、評定者（母親）の認知の特性をより多く反映しているように思

われる。カード投影の差としては、母親に対しての方が「表情豊」が強調される程度で全般的に異同がはらぎりない。なお全体として54年度分と55年度分でかなり異なる結果が示されたことを指摘しておかなければならない。前期と後期では前これらの差は、むしろ異なるので上記一般傾向以上の細かな点は変化を論ずる際に同時考察する。結果Ⅱ（付表）の結果とカード投影結果の比較でもとくに重要なのは、変化の対応すなわち、あるスケールまたはスケール差の得点変化とカード投影指標の変化の対応であり、II節にゆずる。結果Ⅱ（付表）と同様、ある時期における対応は、副次的な問題なので、ここでは前期の治療者評定に関してのみごく簡単に検討するにとどめる。まずC-2のカードをpositive-negative 得点化（1位を2点、2位を1点とした場合のP-N差）したものとC-1の全項目の相関係数を54年度のものに関して求めたところ、5%水準で有意な相関を示した項目は第3表のとおりである。

(A) 対「遊び場面」の positive 得点 (C-2) と有意な相関項目 (C-1)		
5-1	THの働きかけに応じる	0.59
1	相談室へ喜んでくる	0.56
8-1	感情表現が豊かである	0.52
10	指示に従う	0.39
4-2	発展的に遊ぶ	0.39
11	自分を押しやることができる	0.37
(B) 対「TH」との有意な相関項目		
5-2	THに積極的に働きかける	0.48
5-1	THの働きかけに応じる	0.37

全体として評定尺度の結果とカード投影結果とでは、かなりの対応を示し、対「遊び場面」と対「TH」の分化もある程度確認できる。しかし両テストの関係とその用法については、結果Ⅱの変化の検討を怪土で考察した。結果Ⅱ（付表）子どもの変化に関する知見（付表）を子どもに関する諸テスト結果を吟味するに先立ち、まず各テストの諸測定値の変化を一覧表（付表）として示す。（全体または一部の測定不能例は除いてある。）前中後期または前後期の変化のパターンおよび前中後期別重要指標の比較を54年度、55年度別々に記したものであ

る。以下各項においてこの一覧表に基づき必要に応じてさらに細かな分析を加える。

注) C-3, C-4の母親評定は、両年度とも前期5月、後期10月を比較したものである。C-1, C-3の治療者評定は毎回行なわれており、その連続的変化過程をパターン化すること、前後比較においても前期数回、後期数回の平均値による比較を行なうことが当然に考えられなければならないが、後の機会にゆずり、本報告ではC-3, C-4の測定時点に対応した前期1回後期1回の比較にとどめ、なお参考に7月時点のものを中期として用いた。予備テストの結果がC-1に関しては極端な変動が少ないこと、C-2は変動があるが、本格的図式投影研究ではその点も考慮した上で次回以降の整理が可能なので、ひとつの統計法として正当づけられる。1回限りの測定を生かすという現場実務上の要請にも応じるものである。もちろんC-1に変動のあるケースもあり、とくに付論に示すようなある特別な意味をもたらすセッションがそれに該当している時には、その指標が前後変化を代表しえないことが明白である。またC-2の図式投影結果も今回は、とりあえず要素的整理にとどめるという意味では、前後1回比較は不十分である。本論は、このような限界をふまえた上で前後1回比較についての検討であり、一方では前後数回ずつの統計的比較研究、他方では ideographic な事例研究の積み重ねを含んだ今後の報告によって補わなければならないものである。

II-1 play 行動評定尺度 (C-1) における変化

(II-1A) 項目別変化：前報予備研究の場合と同じく、まず項目別得点の前期、中期、後期の平均値を求めた(第4表)。一貫して得点が増大し(主として望ましい方向に変化し)、かつ前後期の差が0.5以上のものが*印のものである。(*)は中期が一貫しないもの。両年度の結果は、8がかなりよく一致し、1(相談室へ喜んで来る)、5-2(THに積極的に働きかける)、7(身体接触をして欲しい)、10(指示に従う)の変化が目立ち、8-1(感情表現が豊かである)もかなり一貫している。なお参考までに前後比較のみを、一覧表(付表)の第1段に記してある。

(II-1B) カテゴリー別得点の変化：(II-1A)で得られた5カテゴリーごとにそのカテゴリーに属するスケール得点(以下カテゴリー得点と呼ぶ)の平均値を、前期・中期・後期のそれぞれについて求め、前-中-後変化のパターンを設定し、その頻度を求めたのが一覧表(付表)第3段である。カテゴリーIII(遊びの活発さ)における漸増傾向がまず両年度を通じて明確であり、遊びが治療にもなって活発化していることを裏づけている。ついで

第4表 C-1項目別前・中・後期得点

54 年 度				55 年 度			
	前	中	後		前	中	後
1*	2.40	2.71	3.03	1	2.56	2.94	3.17
2*	2.88	2.44	3.45	2	3.09	3.21	3.38
3	1.52	1.03	1.59	3	1.12	1.24	0.86
4-1	2.15	2.18	2.17	4-1	2.12	2.24	2.31
4-2	1.60	1.80	1.97	4-2	1.68	1.94	2.10
5-1	1.71	1.47	2.14	5-1	2.18	2.29	2.72
5-2*	1.52	2.15	2.42	5-2	2.06	2.44	2.97
6-1	1.50	1.38	1.38	6-1	1.47	1.35	1.72
6-2	1.52	0.94	1.62	6-2	0.94	1.24	1.24
6-3	1.05	0.85	0.97	6-3	0.71	1.06	1.21
7*	1.76	1.71	2.31	7	2.06	2.44	2.79
8-1*	2.38	2.59	2.93	8-1	2.65	3.03	3.10
8-2	2.31	2.47	2.38	8-2	2.03	2.03	3.17
9-1	1.81	1.62	1.93	9-1	1.91	1.79	1.97
9-2	2.36	2.50	2.79	9-2	2.59	2.74	2.90
10*	1.91	2.03	2.42	10	1.79	2.18	2.41
11	2.10	1.91	2.17	11	1.68	2.15	2.31

カテゴリーV(言語)が両年度とも改善傾向があるが、後期に逆転するケースもかなりある。(55年度では結果が若干ばやけている)。IV(他のメンバーとの関わり)は両年度同傾向であるが、ともあるので全体の傾向としては漠然としている。その他カテゴリーIについては、結論を保留すべきであろう。カテゴリーIV「THとの関わり」は一貫していないが、前述したようにそれに属する項目別傾向にはかなり漸増傾向が認められるのである。

(II-1C) 望ましい方向への変化：上記カテゴリーとは別にスケールの一方の極が明らかに子どもの状態がよいと思われる11項目(1, 4-2, 5-1, 5-2, 6-1, 6-2, 6-3, 8-1, 9-1, 9-2, 10)を選び、それらを合計した得点の変化を見た。結果は総括表第2段に記したとおり、一般的傾向としては好ましい方向への変化、とくにが両年度とも多いが、後半がそのようなにならない例も無視できず、逆に前半が悪化している例もある。ちなみに前後変化のみをとってみると、54年度81.4%、55年度82.8%と好ましい方向への変化が明確にあらわれている。

II-2 生活場面行動質問紙 (C-3) の変化
(II-2A) 項目別変化：play 行動評定尺度 (C-1) の場合と同じくまず項目別前後変化をみたが、55年度において、2-2(留守番ができる)が平均値0.5以上の下降(得点)を示しているほかは、顕著な変化はみられず、2-2も55年度がむしろ上昇していて一貫性がない(表

略)。

(II-2B) カテゴリー別得点変化：前節で設定した3カテゴリー得点の個人別変化は、一覧表C-3第3段に示したように、54年度においてII(大人との関係)及びI(一般的関心)が若干改善傾向がみられるものの、55年度では否定的であり、総じて一貫した変化は認められない。

(II-2C)「望ましい方向」への変化が明白な項目の合計点においては、望ましい方向へ変化したものが54年度44.0%、55年度52.0%となっているが、望ましくない方向への変化も24.0%、40.0%となっており、生活場面での改善に関する親の評価が高いものではないことが示されている。

以上を要約し、母親評定による生活場面においては、54年度に親・大人との関係を中心とした改善傾向が若干認められるものの、全体的に不明確であり、とくに55年度は、子どもの行動改善が明確にとらえられていない。両年度の差の考察は、最後にゆずるとして、とりあえず前項C-1と比較した場合、①play 場面での変化が生活場面に般化されるほどには至っていないこと、②治療者評定が変化を認める方向へのバイアスもちやすいこと(または母親が逆の傾向をもつこと)、③そのひとつとして、学生治療者および母親自身の認知構造の特質の問題が疑われる。これらの点は後の機会に母親及び治療者の認知研究の結果と吟味されるべきものである。

III-3: カード式投影法(C-2, C-4)における変化

要索的整理法は、カード式投影法の常道にしたがって第1位による分類、第2位による分類及びカード別得点(1位2点、2位1点の合計)に分けて行なわれるが、ここでは、カード得点はカード別にせず、P-N得点のみを用いた。

(II-3A) 相談室内変化：「play 場面」に対するカード式図式投影結果の変化は、付表(変化の一覧表)C-2@のとおりで「孤立」が減少し「快」が増大する傾向が示されている(頻度の高い2カードのみを表示)。P-N得点は一般に、前期から中期で上昇傾向にあり、後述するように1位・2位カードとも positive 化する傾向にある。(55年度 P/PP は $28/34$)。おそらくこのゆえに後期では、それ以上上昇しえないか下降するという結果になっている。一方「THに対して」は、ほとんど一貫した傾向を認めることができない。ただしP-N得点は、やはり前期から中期にかけて上昇する動向にある。(詳しくは次のパターン別変化を参照)。

(II-3B) 母親評定による「生活場面図式投影」結果の変化：付表C-4に示したが、ここでは一貫した変化はほとんど認められていない。P-N得点は、positive化

する傾向にあるが、55年度においては約半数が変化なしである。II-2の尺度評定の場合と同じく両年度の差がかなり認められることもカード投影結果の変化の一貫性をわかりにくいものになっているように思われる。一方「対母親」においては(これもC-3の場合と同様)、両年度とも前期から positive なカードのみが選ばれており、P-N得点はほとんど変化しない傾向にある。カード別にも両年度一貫した変化は認められていない。

(II-3C) カード投影パターンの変化：最後に(I-1D)で行なったP-Nパターンに加えて対概念類別A~Eをクロスさせた結果を第5表で示した。前後期の変化については、54年度、55年度双方において比較的变化傾向の一貫しているものをゴチック表示した。すなわち①快-不快を軸とした positive 化傾向、②play 場面における孤立の減少、③play 場面全体としての N/PP の減少(ないし negative な第1カードの減少)、④全体として完全な positive 型(P/PP)の増加(ただし対母親のをのぞく)である。すでに母親とは始めから positive な関係にあった子どもが、治療者に対してもまた play 場面、生活場面に対しても positive 化し、それはとくに治療場面における「孤立」の減少「快」の増大を中心に治療者に認知されているとみられる。これに対して*印の箇所は、変化が一見みられるものの他の年次において矛盾しているものもある(対母親C類など)。

次に重要なポイントとして play 場面、TH評定結果C-2と生活場面、母親評定結果C-4との対応であるが、54年度を基調として見ると、一貫しない面の方がむしろ強調されているように思われる。合計欄とくにP-N分類において P/PP 対 play 場面と对生活場面の P/PP の増加が対応しているのみである。(55年度も同傾向)。組み合わせ分類の中でC-2とC-4が逆傾向になっていると見られる大部分のものは、55年度においてその逆傾向も追認できず、わずかに四角で囲った2箇所のみ若干矛盾が、認められる程度である。すなわち、対治療者の「孤立」の極(N/PP)が減少するのに対して対母親では「孤立」の極はそもそも存在しないこと、同じく対治療者「無表情」の減少に対して対母親「無表情」が存在しないこと、ただこの結果も、子どもの行動そのものの play 場面の変容とみるか、治療者と母親の認知の差とみるかについては、なお考察を必要とする。

(II-3D) 各テスト上の変化の比較：以上C-2、C-4における図式投影上の変化は、C-1、C-3における評定尺度上の変化とP-N次元では一応対応はしているものの、 P/PP はあまり反映されず漠然としたものになっている。カード式投影法の問題として、次の機会に

第5表 play行動図式投影パターン (数値は前期→後期の頻散変化)

54年度 対 play 対生活場面

	A 快不快	B 交わり孤立	C 安心不安	D 積極消極	E 表豊無表	計	A 快不快	B 交わり孤立	C 安心不安	D 積極消極	E 表豊無表	計
P/PP	3→6		0→1	1→7	0→2	4→16		0→2	1→3			1→5
P/PN	1→1		0→1	4→0	1→1	6→3	2→2	3→0			4→1	9→3
P/NN	1→0			1→0		2→0	4→2	2→0		1→1	2→1	9→4
N/PP		2→0	2→0	2→1		6→1		1→1	0→1	1→0		2→2
N/PN		4→0	2→1	1→1		7→2		1→0	2→2			3→2
N/NN	1→0	2→0	1→1	1→1	1→0	6→2	0→1	1→2	2→1	3→0		6→4
計	6→7	8→0	5→4	10→10	2→3	31→24	6→5	8→5	5→7	5→1	6→2	30→20

対 Th

対母親

	A 快不快	B 交わり孤立	C 安心不安	D 積極消極	E 表豊無表	計	A 快不快	B 交わり孤立	C 安心不安	D 積極消極	E 表豊無表	計
P/PP	1→3	0→4	1→1	1→3	0→4	3→15	1→1	1→1	15→11	2→2	4→4	23→19
P/PN	2→1	4→0	2→1	0→1		8→3		0→1	2→1	3→0	1→1	6→3
P/NN						0→0			1→0			1→0
N/PP			2→0	0→1	1→0	3→1				1→0		1→0
N/PN	1→1		3→2	1→0	3→0	8→3			1→0			1→0
N/NN		3→0	1→1	2→0	3→0	9→1						0→0
計	4→5	7→4	9→5	4→5	7→4	31→23	1→1	1→2	19→12	6→2	5→5	32→22

55年度 対 play

対生活場面

	A 快不快	B 交わり孤立	C 安心不安	D 積極消極	E 表豊無表	計	A 快不快	B 交わり孤立	C 安心不安	D 積極消極	E 表豊無表	計
P/PP	4→9	1→2		4→5	1→3	10→19	2→1	1→3	2→2	0→3	2→2	7→11
P/PN	3→2	1→1	1→0	5→3	4→1	14→7	3→1	2→2	0→1	1→0	0→2	6→6
P/NN	2→0			1→1		3→1		1→0			1→0	2→0
N/PP		2→0	0→1			2→1			2→0	0→1		2→1
N/PN			3→0		1→0	4→0		1→0	0→1			1→1
N/NN		1→0		0→1		1→1	0→1	1→0	1→1		1→0	3→2
計	9→11	5→3	4→1	10→10	6→4	34→29	5→3	6→5	5→5	1→4	4→4	21→21

対 Th

対母親

	A 快不快	B 交わり孤立	C 安心不安	D 積極消極	E 表豊無表	計	A 快不快	B 交わり孤立	C 安心不安	D 積極消極	E 表豊無表	計
P/PP	0→2	6→9	6→6	2→4	1→2	15→23		5→2	7→12*	2→3	4→0*	18→17
P/PN		0→1	3→1	2→1		5→3		0→2	1→1		2→0*	3→3
P/NN		2→0	1→0			3→0						0→0
N/PP	1→0			2→0		3→0						0→0
N/PN		0→1	1→0	2→0	1→0	4→1		0→1				0→1
N/NN	1→0	1→0	1→0	0→2	1→0	4→2						0→0
計	2→2	9→11*	12→7	8→7	3→2	34→29	0→0	5→5	8→13*	2→3	6→0*	21→21

詳しく論じるが、第1に評定尺度の意味するところと文字カードのイメージとのギャップ、および3枚の強制選択に関する当然のギャップが指摘される。
第2に、さらに根本的問題として一般に2段階ピラミッド評定は、評定尺度法に比して、要素的測定法としては不十分なことが他の研究でも示唆されている。むしろ、

ここで採用した手続きに続いて、位置のニュアンスを加えた現象的作品に発展してこそより価値づけられるものであり、当然に今後の心理測定=体験的洞察を發展させる研究によって補われなければならない。研究者の直接観察からして、現在のところカード投影法の方が、(評定尺度法より)ニュアンスをつかめるという感触も

報告されているが、それは、カードを配置していくプロセスを含んで、上記現象的プロセスが伝達されることであり、少なくとも（P-N次元に還元されない）具体的な構造によってであって本報告でとりあげた要素的指標とP-Nパターンによる整理のみでは、結果はむしろ貧困といわれてもよいであろう。

られるが、それは少なくとも一部は、治療者、play室に慣れてきた当然の結果であり、根本的な治療的变化とは言いがたいものを含んでいる。このため、すでに母親と十分にpositiveな関係をもっている生活場面での行動変容に対応しにくいのだと考えられる。障害児の行動改善が極めて徐々なものでしかあり得ないことを考えれば、母親評定による日常生活行動の改善に結びつく程の結果になっていないことも当然かも知れない。母親との面接において報告される細かなプロセスを拾ってあげれば、多くのケースにおいて何らかの改善のプロセスが報告されており、ただそれをとらえるには、ここで用いたC-3、4はおまりにキマが荒すぎたり、治療のプロセスを拾い損ねているのかも知れない。この点はケース研究

付表 変化の一覧表

C-1	項目別変化	54年度(27例)		55年度(29例)					
		前	後	前	後				
①	§ 1 喜んでくる	2.40	3.03	2.56	3.17				
	§ 2 母子分離	2.88	3.45	3.09	3.38				
	§ 5-2 Thに働きかける	1.52	2.42	2.06	2.97				
	§ 6-3 他児に働きかける	1.05	0.97	0.71	1.21				
	§ 7 身体接触を欲しがる	1.76	2.31	2.06	2.79				
	§ 8-1 感情表現	2.38	2.93	2.65	3.10				
	§ 10-6 指示に従う	1.91	2.42	1.79	2.41				
	§ 11-6 自己抑制	2.10	2.17	1.68	2.31				
	④ 望ましい方向への変化	前中後推移頻数	6 (22.2%)	11 (40.7%)	2 (6.9%)	14 (48.3%)			
	②	I 母子分離と緊張の緩和	10 (37%)	4 (14.8%)	6 (20.7%)	5 (17.2%)			
		II 遊び	6 (22.2%)	6 (22.2%)	7 (24.1%)	6 (20.7%)			
III Thとの関わり		11 (40.7%)	5 (18.5%)	7 (24.1%)	6 (20.7%)				
IV 他児との関わり		6 (22.2%)	6 (22.2%)	8 (27.6%)	7 (24.1%)				
V 言語		10 (37%)	7 (25.9%)	7 (24.1%)	5 (17.2%)				
C-2	⑤ Play 場面	1位	積極 32.5% 孤立 22.5% 快 15.0%	積極 41.7% 快 27.8% 消極 8.3% 無表情 8.3%	積極 35.7% 快 28.6% 表情豊 14.3% 無表情 8.3%	快 29.4% 積極 29.4% 表情豊 11.8%	快 50.0% 積極 20.6% 表情豊 14.7%	快 37.9% 積極 31.0% 表情豊 13.8%	
		2位	快 18.8% 無表情 16.3% 積極 18.3%	快 22.5% 表情豊 22.5% 積極 18.3%	安心 19.6% 表情豊 19.6% 快 18.6%	表情豊 19.1% 孤立 16.2% 積極 19.1%	表情豊 30.9% 快 20.7% 積極 19.1%	快 20.7% 積極 19.0% 表情豊 19.0%	
	PN 相点	(前中後推移型)	前	40.7%	18.5%	27.6%	17.2%		
			後	40.7%	18.5%	27.6%	17.2%		
	⑥ Th に対して	1位	前	不安 19.5% 無表情 17.1% 消極 13.9% 表情豊 13.9%	安心 33.3% 積極 13.9% 表情豊 13.9%	安心 25.0% 交わり 17.9% 表情豊 17.9%	安心 29.4% 交わり 23.5% 積極 11.8% 消極 11.8%	交わり 23.5% 積極 23.5% 安心 20.6% 積極 17.6%	交わり 34.5% 安心 24.1% 積極 17.2% 表情豊 17.6%
			2位	消極 21.9% 安心 15.9%	交わり 22.5% 安心 18.3%	交わり 25.5% 安心 20.0%	交わり 17.6% 安心 14.7%	安心 19.1% 快 17.6%	安心 25.9% 快 13.8% 表情豊 13.8%
		PN 相点	(前中後推移型)	前	44.4%	18.5%	31.0%	24.1%	
				後	44.4%	18.5%	31.0%	24.1%	

である程度明らかにされているが、統計的にさらに例数を重ねた後に結論づけたい。(後の報告に予定しているより本格的な図式投影法も参考になると思われる)。54年度に比して55年度の変化が不明確である理由は、今のところ充分明らかではないが、客観的に考えられるひとつの理由として、前年度からひきついで継続ケースが55年度の方がかなり大であったことは指摘しておかなければならないであろう。また、この段階では、序説に掲げた「生活の投影とその生活への feedback」という相談室の機能の明確化には至り得ないが、少なくとも play 場面の行動変容と実生活への feedback がそう単純なものでないことを改めて認識させるものである。

第2の評定の bias, すなわち母親および治療者の認知の問題については、後の報告で分析を行なった後に吟味

することとして省略する。最後に統計研究法自体の問題として、ある一時点をとらえた要素的指標の前後期比較を行なったことその他予備研究で指摘した問題点がやはり残っていることは否めない。ただ次の事例研究に示すように実際にはこれらの要素を骨子としながらもケースの構造的、現象的理解が進行しつつあるわけである。そのような複雑な骨組と肉付の知見を研究論文としていかに伝達するかは後の機会にゆずる。今回の報告は、要素的統計の限界を知りつつ、その重要な point をできるだけ明らかにしようとしたものであり、なお年次の積み重ねが若干必要ではあるが、比較的一貫した変化を示す指標をよりどころに、われわれは現場相談機関で使用しうるケース記録のひとつの形を確立する方向を見出しつつある。それは、それ自体で何かを

C-3		前		後	
① 項目別	割合				
② 望ましい方向への変化		44.0%	24.0%	52.0%	40.0%
③ カテゴリー別変化					
I 一般的関心		8 (53.3%)	4 (20.0%)	8 (40.0%)	4 (20.0%)
II 大人との関係		3 (20.0%)	4 (20.0%)	8 (40.0%)	9 (45.0%)
III 遊ぶこと		4 (26.7%)	9 (45.0%)	9 (45.0%)	9 (45.0%)
IV 遊ぶこと		6 (40.0%)	7 (35.0%)	7 (35.0%)	4 (20.0%)
V 遊ぶこと		4 (26.7%)	5 (25.0%)	9 (45.0%)	9 (45.0%)
		5 (33.3%)	9 (45.0%)	9 (45.0%)	9 (45.0%)
C-4		前	後	前	後
日常生活 1位	快	20.0%	24.0%	24.0%	24.0%
	表情豊	20.0%	16.0%	16.0%	16.0%
	快	16.0%	16.0%	16.0%	16.0%
2位	不安	22.0%	22.0%	20.0%	22.0%
	孤立	20.0%	14.0%	16.0%	18.0%
	快	12.0%	12.0%	16.0%	18.0%
PN得点		32.0%	28.0%	48.0%	28.0%
母親に対して 1位	安心	64.0%	56.0%	40.0%	64.0%
	積極	8.0%	24.0%	28.0%	16.0%
	表情豊	8.0%	12.0%	16.0%	14.0%
2位	表情豊	22.0%	28.0%	26.0%	26.0%
	積極	20.0%	22.0%	22.0%	22.0%
	快	16.0%	20.0%	16.0%	14.0%
PN得点		72.0%	20.0%	76.0%	12.0%

断定するものでなく、具体的事例記述のシチュエーションを媒介点になるようなものになるであろう。

付論1 事例研究によるテスト指標の検討 (その1)

この付論の目的は、1 ケースの検討によって本論のテスト C-1～C-4 にあらわれた評定者の認知と臨床的事例記述にみられるような現象的認知との対応・非対応を吟味することにある。ここでは、家庭生活センターにおける1例をとりあげ、約3ヶ月後に繰り返ったケース会議をもち、そのケース会議において明らかにされたスタッフの認知とセッション当時のテスト結果との関係を見た。したがって親の認知 C-2、C-4 については、付加的に問題にしたにすぎない。

〔ケースTの背景〕6歳男児、ことばの遅れ(精神発達全体の遅れ)・母子分離不能、友人のなさを主訴として約3年前に家庭生活センターに来所。出生は2週間早く、4,050g、分娩重く、生後3ヶ月時に「心臓中核欠損」と診断された。6ヶ月、高熱1週間続き43日間入院(化膿性髄膜炎)。その他喘息があり、風邪もひきやすい。歩行は2歳半で、その後も外では歩きたがらず、オムツ使用。だっこ、おんぶの要求多い。来所時もオムツ使用。ことばは、イヤ、ヤダー、ネンネ、マンマ程度だが、意味のないことばはいろいろ出た。理解力は「シーイコウ」「オンモイタヨ」ぐらいのレベルであった。遊びは絵本、自動車、ボール、積木、プラシコ等。テレビはCM、マンガを好んでいた(session時現在でも大きく変化はない)。

来所時より約3年、家庭生活センターで週1～2回の集団治療を続け、55年度より通園日が4日となる。日によって集団メンバー若干異なる。4月の開始当初は、母親の病気や祖母の入院などのため欠席がつづき、4月末よりメンバー3人(5歳男、自閉、2歳7ヶ月男、ダウン症)の集団に参加、メンバーは、5月から1名増える(4歳男、自閉)。5月風邪、雨、祖母の病などで欠席が続いたが、次に記すのはその直後5月下旬の play session である。

〔ある1 sessionの概要〕父親が play 室まで連れてくる。素直に入室。日課に従ってシール帳を全介助により所定の位置にかけさせる。持ち物をかけてから小走りで「町づくり」の袋をとりに行き、上段の棚から降ろす。目的のもの(町づくりのボード)が手に入ると一緒におろした他のものは放り出したままである。かたづけするようにいうがやらず、ボードをもって隣室(別の曜日のときに使う play 室)へ行ったがる。禁止しても行った

いと頑張るのでTHがつれていくと、棚から本「菜の花」をとりだし、すわり込む。他の本をTHがみせても、受付けない。本とボードをもちて立つように促すが、すわり込む。THがボードをもちて立たせ、もとの部屋へ戻ると、机と椅子のところにきて椅子にすわり、ボードを机の上におく。THがボードに家や人を立たせようとすると、すぐはずす。片づけておさめるとそれは嫌がらない(本はその後ももち歩いていた)。

やがてトランポリンをすわって遊ぶ。別の治療者が、立たせ後から支えてべったりした姿勢で遊ぶ。やめるとまたやれと(動作で)要求。支えられ、保護されているような感じを楽しんでいるようで気嫌がよい。1人でとんでいる時も視線を向けてかまってもらいたがるようである。

描画の時間になったため、その治療者に後から支えたままの姿勢でトランポリンから降りる。机のところに連れていくが、すぐには切りかえがきかない。そのうち意欲をみせ、赤えのぐでかき始める。筆にふくませることは自分ではできないが、かけなくなるまでかく(2枚)。絵本をもったままで、えのぐが絵本についたり、手についたりしてもかまわず、黄色をつけて渡してもかかず、赤のみに固執。この間他児の動きをととききみている。

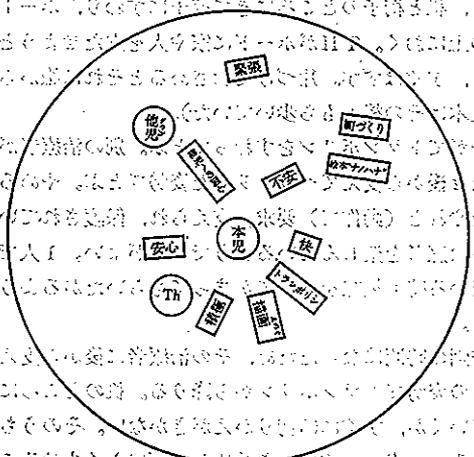
最後のかたづけのときは、じゅうたんの上ですわったままであり、レールを渡してみたが投げてしまう。シール帳をどりにいがせたところ、とろうとするがひっぱるのみでとれずTHが介助。シールはりにはちゃんと横にはる。最後の歌「むすんでひらいて」2番の「おへそに」を喜び笑う(珍しい)。

〔ケース会議における図式投影的認知〕ケース担当者の上述の報告に基づき、第2図にみられるような遊戯状況の図式をケース会議は参加者5人(担当者1、その他のスタッフ4)が作品化した。使用カードは、自由カードに加え、統計研究C-2、C-4で用いた標準カード及びC-1のカテゴリ1名に準じたカードを数枚用いることにした。

次に上記作品についてスタッフ5名がそれぞれの作品の説明及び自己のケース認知を報告、それに基づいて若干の討論がなされた。討論の中でとくにとりあげられたことは、①別室の誘因性の意味(どちらかといえば「オノハナ」の本に魅力があったのではないかと担当者が説明)②赤えのぐや他児への関心が以前に比べて画期的だったということ、③積極性に関してはTHの働きがけに応じることができる程度で交わりはまだ弱く、その後のセッションで積極性が低下もしていることであった。

第2図は、担当者(報告者)の play 状況認知図式であ

るが、その他4人のスタッフの作品において比較的共通に強調されたことは、④グループ全体から本児が比較的孤立しており、報告内容の諸要素が円の中央に配置され、第2図の担当者によるplay図式投影(第1回)



第6表) 担当者他のスタッフが用いたカード(左)と当該セッション評定時のC₁C₂結果(C₁カテゴリーA印中×印は平均マイナス傾向すなわち、5段階の3以下のもの、*はC₂カード)

カード	担当者	他のスタッフ	Session 略評定		
			C ₂ 対play	C ₂ 対T.H	C ₁
菜の花の本	○	4			
街ボード	○	4			
トランポリン	○	4			
ペインティング	○	3			
歌(歌えのぐ)	○	2			
お弁当(食べる)	○	2			
拒否(拒否)	○	2			
*自由快	○	4		2位	
*不安快	○	3			
*交わり	○	3			
*孤立	○	1	1位		
*安心	○	4	2位	1位	
*不積極	○	1			
*積極	○	2			
*消極	○	1	2位	2位	
*表情豊	○	3			
*無表情	○	3			
△遊びへの関心	○	1			×
△(Thへの)関心	○	3			×
△他児への関心	○	3			×
△言語理解	○	1			×
△緊張	○	1			×

ない。④強制ないし指導に対する拒否と一方「安心」があり遊びへの「積極性」が見られることであった。なお④1名においては円の半分に報告事項の要素がカード投影されその他の半分の余白が「不安」を意味し、報告された遊びによってのみ、不安が解消されている姿が強調された。担当者以外4名の用いた主要カード(規定カード以外は2名以上の用いたもの)は、第6表のようであり、担当者のそれと極端にちがっていない。「不安」「緊張」は担当者以外のスタッフの図式に登場していないが、上記④に典型的に示されているように余白に言外に感じられている。おそらくケース報告の要約の中にこれらが直接明記されていなかっただけかとも思われる。
 (注) 事例報告自身がたとえばはじめに「全体としては孤立的・消極的ではあるが…」という前置きないし注釈を本来必要としていたものだと見える。その場合(他の同種の研究例からして)担当者においても、他のスタッフにおいても、「孤立」「消極」などが「explicit」なものになり、第2図のような図式投影作品にも(上段の「緊張」と同じような意味で)余白部分に「孤立」「消極」が記されやすくなると考えられる。なお図式の構造的メカニクスには、もちろん(各参加者間にもまた担当者との間にも)個人差があり、それが現象的理解の微細なメカニクスに差に関連しているのであるが、ここでは省略する。
 (ケース担当者の認知のずれ) 以上の手続きによってえられた図式投影における規定カードは、当該セッション当時に担当者が評定したC-2のカードと一致するはずである。またその他の自由カードおよびケースの具体記述は、当該セッション当時のC-1の項目評定結果と一貫性をもつはずである。そこで当該セッションのC-1、C-2の結果(第6表の右欄)とケース会議における担当者の認知の一致・不一致を検討した。担当者の認知のずれとして問題になったのは、次の諸点である。①C-1のカテゴリーでは、「緊張の度合」が低いにもかかわらず第2図で強調されていること(理由不明)；項目4「1遊具への関心」がC-1で低いのは、遊具が安心の材料として用いられており、真の「関心」とみなせないという臨床感覚に基づくものであることの2点であった。C-1カテゴリーに関しては省略する。②C-2のカード投影で1位をもめた「孤立」が、第2図で出現していないことについては、グループ全体からの孤立は明白であり、ただ本ケース会議が本人の特殊な動きをもったセッションということに焦点づけられたために無視されたものようであった(したがって「地」のメカニクスに含まれていると解釈できる)。2位

カードの「消極」についても全体としては、消極的であることに相違はないという上記同様の考察がなされた。

その他対遊び場面の「安心」、対THの「安心」「快」はいずれも第2図で重視されており、担当者の認知の一貫性を示している。またその他のC-1の項目についても、とくに大きな問題点はないようであった。またこれらの点に関する限り、前期12回のC-1、C-2の平均値をとってみてもとくに否定されない。逆にC-1の項目7「身体接触をしてほしがる」5-2「親に相手をしてほしがる」等では、当日の値が、前後に比してプラスの値になっており、まさにこの回のセッションの特徴として事例報告および図式にマッチしたものだといえる。

注) 本事例研究ではこのほか、討議の後各参加者が作品を修正して第2回作品を作成しており、図式投影によるケース研究法(ケース認知の共有過程の研究)としては、この際の認知変化の規則を発見することが重要であるが、今回報告の目的からずれるので省略する。

また、後期の測定時点までのケースの流れについての検討と、C-1、C-2の変化の態様の検討も(前期12回、後期12回の連続過程及び平均値の検討を含めて)行なっているが、それは予備研究前報(第4報)に記した手法と異なるものではないので省略する。同様にして母親からみた子どもの具体的過程(母親担当者報告による)とC-3、C-4との対応も検討されているが省略する。ただこの事例が、全体的に明確な変化を示していないためもあり、その限りでは、C-1～C-4のテストが微細なニュアンスをとらえきれない限界も指摘されている。この点を打開すべき本格的図式的投影法及びより現象学的なアプローチの問題として、次報以降にゆずらなければならぬゆえんでもある。

付論2 事例研究によるテスト指標の検討 (その2)

この付論2は、本論における評定尺度及び図式投影の結果が、より現象学的な記述や自由図式投影といかに関連するかをみるものである。ここではケース会議前日にもたれたあるケースのSessionについて、ケース会議参加者6名がC-1、C-2の評定をまず行ない、その後本格的図式投影にむけて、付論1とは別の(C-2に対応した)図式投影を行ない、同時に自由記述記録も行なうことによって、C-1、C-2式自由図式投影、自由記述の4者関係をみようとしたものである。次報に予定されている図式的投影法の骨子を例示すること、およびそれと本論との橋渡しを例示するという目的をかねて付論とする。なお以上の最低限の目的に従い、事例報告の内容は

省略し、あるひとりのスタッフ(集団・play参加者)の自由記述をもってこれに変えて、それと図式作品およびC-1とC-2の関係を吟味する(注)なお、このケース研究においても会議を通じてのスタッフの認知の共有過程の(とくに図式投影における一致度の増大)が認められ、分析がなされているが本題と離れているので別の機会にゆずる。〔担当者の報告要約〕play室に自ら入り、背示によりシールかけ。歌「あいさつ」の後、先週の続きで鉄橋を作ってプラレール遊びをする。THが補佐する。別のTHが駅に人形を置く。テラリスと見、排除はせずプレイハウスへ。テラリスの周りに火を配し、コーヒーカップがギンパン(コーヒーのミニミニギンパン)を置く。ガレージに自家用車、トラックなど2、3台をピタリと詰める。ベッドに2、3人の人を寝かせる。詰め終わるとピタリ閉じる。THがブロックで階段が「トントン」と窓を叩くとそれを模倣する。次にすべり台に座布団を敷いて座ってすべる。集中してやる。その後テラリスを跳ぶが、THが右手を補佐する。またへウス遊びに戻り、他児が寄って来る。コーヒーをとられるとイヤダーというような不快を表わす発声あり、THの手をとり、とり返して欲しいという欲求の表現をする。

自動車遊びでは自分からも色々試み、他児からの刺激もある。生き生きと積極的である。その他箱積木、ぬり絵等を行ったのち、ボーリングをすべり台の下にセットすると、機敏にとんで来てすべりピンを倒す。最後の片づけは、やる気ないが、最後の名前呼びに対しては声を出して手をあげ、シールはりは介助なしに行なう。昼食はいつもより落ちついてフォークで食べていた。

〔スタッフAの評定および図式投影〕事例報告を聞きながらの前期自由記述に続いて、各スタッフがC-1、C-2を評定した。第7表はスタッフAの評定結果と全スタッフの評定平均値を比較対照させたものである。言語を中心とした若干の点をのぞけば、Aの評定結果とA以外のスタッフの結果とは大きくずれていない、A以外のスタッフ間においても比較的一致している。

次いでC-1カテゴリー面を記した5カードを加え、第3-A図の層構造方式で1位2～3枚、2位2～4枚、3位「背景の気持」3～4枚の教示により、カード式図式投影を行なった。第3-A図はスタッフAの作品であるが、C-1では強調されなかった「緊張」が1位におかれるという点以外はC-1と大きな矛盾はない。なおC-1カテゴリーカードが上位にきたため、C-2の積極は、一段落ちていものとみなせるが、「無表情」が第3-A図

で使用されていないという矛盾もみられる。これらは他のカテゴリーとの関係、全体の構造的連関においておなずける面もあるが、やはりカテゴリー投影の要素選択の不安定性にも起因しているとみなければならぬ。

図式的投影法では以上のような規定作品の後、領域がカテゴリーの数を自由化し、位置と構造のニュアンスに重点をおいた「最もピッタリする」自由作品を作成し、現象的理解のニュアンスに近づくことが多いが、そのステップをふんだ結果のスタッフAの作品は第3-B図である。第3-A図で指摘したC-1、C-2どのカテゴリーは、そのまま存続しているが、「積極」が上昇するなど、全体の構造としてはC-1、C-2の結果にむしろ近づいており、さらに自由記述にあらわれた認知のニュアンスに近づいているとみることができる。

第3-A図 規定作品 第3-B図 自由作品

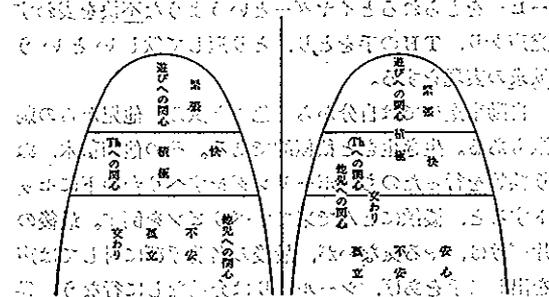


図3-Aは、遊びの場、遊びの中心、遊びへの関心、という3つの階層からなる。遊びの場は、遊びの中心を囲むように配置され、遊びへの関心は、遊びの中心と遊びの場との間に位置する。図3-Bは、遊びの場、遊びの中心、遊びへの関心、という3つの階層からなる。遊びの場は、遊びの中心を囲むように配置され、遊びへの関心は、遊びの中心と遊びの場との間に位置する。図3-Aと図3-Bを比較すると、遊びの場、遊びの中心、遊びへの関心、という3つの階層の配置や関係性が異なることがわかる。

述にあらわれた現象的理解との橋渡しとして、次報以降の図式投影研究の意味に期待をつなごうものである。

第7表

カテゴリー	スタッフA	他スタッフ平均		
C ₁ スケル得点 (★は1以上のズレ)	1	5	4.2	
	2	15	4.6	
	3	2	2.4	
	4-1	4	3.8	
	4-2*	4	3.0	
	5-1	3	3.0	
	5-2	3	2.6	
	6-1	3	2.4	
	6-2	2	2.0	
	6-3	2	1.6	
	7	2	2.4	
C ₂ 対play場面	1	積極	積極(3/5)	
	2	無表情 快	快(3/5) - 安心(2/5) 消極(2/5)	
	C ₂ 対Th	1	無表情	安心(3/5)
		2	安心 不安	消極(4/5) 快(2/5)

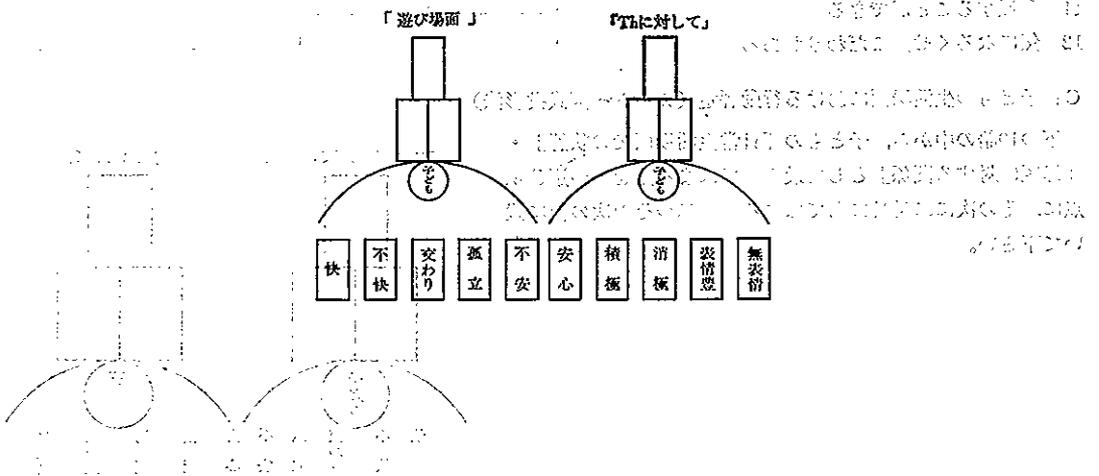
図3-Aと図3-Bを比較すると、遊びの場、遊びの中心、遊びへの関心、という3つの階層の配置や関係性が異なることがわかる。図3-Aは、遊びの場、遊びの中心、遊びへの関心、という3つの階層からなる。遊びの場は、遊びの中心を囲むように配置され、遊びへの関心は、遊びの中心と遊びの場との間に位置する。図3-Bは、遊びの場、遊びの中心、遊びへの関心、という3つの階層からなる。遊びの場は、遊びの中心を囲むように配置され、遊びへの関心は、遊びの中心と遊びの場との間に位置する。図3-Aと図3-Bを比較すると、遊びの場、遊びの中心、遊びへの関心、という3つの階層の配置や関係性が異なることがわかる。

C₁ 子どものPLAY行動評定尺度 CASE名 担当名 曜グループ 実施年月日

	喜んで来る	どちらともいえない	いやがる
1 相談室へ喜んで来る	5	4	3
2 親と分離でき遊べる	5	4	3
3 緊張の度合 (不安そうに身をこわばらせるなど)			
4-1 いろいろな遊具に関心を示す			
4-2 発展的に遊ぶ			
5-1 THの働きかけに応じる			
5-2 THに積極的に働きかける			
6-1 他のメンバーへ関心を示す			
6-2 メンバーの働きかけに応じる			
6-3 メンバーへ積極的に働きかける			
7 身体接触をして欲しがる			
8-1 感情 (喜怒哀楽) 表現が豊かである	5	4	3
8-2 感情の動揺が激しい			
9-1 言語表出がある	5	4	3
9-2 言語理解がある			
10 指示に従う			
11 自分を抑えることができる			

C₂ 児童臨床用・カード・図式投影法

下の10語のカードの中から「子どもの遊び場面に対する状態」「THに対する子どもの状態」として最もピッタリするもの一つを頂点に、次にピッタリするもの2つを次の欄に置いて下さい。



目 C3 生活場面での子どもの行動評定尺度 氏名 No. 年月日 No.

	非常に	かなり	いづらか	ほとんど	まったく
1-1 家の中で元気に遊ぶ	1	2	3	4	5
1-2 家の外で元気に遊ぶ					
2-1 ひとりで遊びに出かける					
2-2 ひとりでまたは兄弟と留守番ができる					
3 初めての所へ行くと不安になり身をこわばらせたり泣いたりする					
4-1 いろいろなものに関心を示す					
4-2 自分でいろいろ工夫して遊ぶ					
5-1 親が相手をしてあげると喜ぶ					
5-2 親に相手をして欲しがる					
5-3 家族以外の大人が来た時、相手をしてもらうと喜ぶ					
5-4 家族以外の大人が家に来た時、その人に相手をして欲しがる					
6-1 近所の子どもが家に来た時友だちの働きかけに応じる					
6-2 近所の子どもが家に来た時に友だちに働きかける					
6-3 友だちの家や公園に行った時友だちの働きかけに応じる					
6-4 友だちの家や公園に行った時友だちに働きかける					
7 親に抱かれたがる(親のひざにすわりたがる)					
B-1 感情(喜怒哀楽)表現が豊かである	非常に豊か	2	3	4	全く乏しい
B-2 感情の動揺が激しい	安定している	2	3	4	激しい不安定
9-1 言語	3 語文以上	1 語文 ~2 語文	有意語 1~3 語	喃語模倣 レベル	発声・有意 語なし
9-2 親の言うことがわかる	1	2	3	4	5
10 親の言うことに素直に従う					
11 我慢することができる					
12 気になるくせ、こだわりがある					

C4 子どもの生活場面における行動評定(カード・図式投影法)

下の10語の中から、子どもの「日常生活場面での状態」・「母親に対する関係」として最もあてはまる語を一つ選び頂点に、その次に二番目にあてはまる語を二つその次の欄に置いて下さい。

